

～柔らかな石～



「徳川家康って知ってるか？」
「うん！ 知ってるよ」
「その殿様がね、昔、戦のとき
この石を机にして、この岩に腰掛けたんだよ」
「ええっ、ほんま!」

ちびっ子探検隊員毎日を丸くした。
——これは関ヶ原古戦場を取材したときの話。

湖北にも、戦国の世のみならず、
神話の時代からの、物語をもつ石がいくつも残っている。

その不規則なカタチに
神さまの居場所を連想したり
何かを見立てたりしたのだろう。

傍らに仏さんや神さんがおられる石…
泣く石、姿を変えた石…
誰かが腰掛けたり、持ち上げたりした石…

現代の作家も
切り出した石に息吹を吹き込んでいる。

硬い石の内側には、なんて柔軟なお話が潜んでいることだろう。

▲曲谷のざざれ石

岩ヶ谷の天狗岩 (米原市岩ヶ谷)

溪流の奥に梵字が刻まれた大きな岩

梓河内の東に世帯数十一軒の集落

米原市の醒井から柏原へ、国道二十一号を東へ向かうと、右手に名神高速道路が並行して走っている。高速道路の向こう側は、深い山。その先に集落があるとは思えないが、実

は二つの集落がある。梓河内と岩ヶ谷だ。

梓河内は、霊仙山へ柏原から登る登山口のひとつ。冬の伝統行事オコナイに、大きな木で作った男のシンボルが出ることや、端午の節句に野神さんへチマキをお供えすることで知られている。でも、岩ヶ谷ってどこ？ そんな人が多いのではないだろうか。

岩ヶ谷は、梓河内の東にある小さな集落。世帯数はわずか十一軒だ。名神高速道路のアーダーを抜けると、霊仙山から流れる溪流に沿って家並みが現れる。

天狗岩は溪流の奥にあるのだから、誰かに尋ねてから行くのが無難。そう思って歩いていくと、いちばん奥近くのお家の前に「ご婦人を見つけた。

「天狗岩は？」と尋ねると、「主人を呼びますから」と言ってお家に入り、換わって現れたのが藤田勝彦さん(62歳)。

「付いてきて来てください」と言っておいて、溪流に沿った林道をスタスタと歩いて案内してくれた。

高さ五十メートルもある大きな岩

集落から三百メートルほど溪流をさかのぼると、流れは二俣に分かれている。そして、



▲藤田勝彦さん

二俣の真ん中に高さ五十メートルもあるうかという、大きな岩がそそり立っている。針葉樹が密生する森の中なので、なかなか岩の全体像がつかめない。右手にまわって岩の下まで行くと、何かのマークと思われる字が刻まれているのが見える。字が刻まれていることから、天狗岩は弘法大師の筆投げ石とも呼ばれている。「喜ぶ」という意味の梵字だそうです」と藤田さんは言う。「昔、この地は大和郡山藩の所領だったそうで、殿様に子どもが生まれたのを祝って梵字を彫ったのだと聞いています」とも。

藤田さんが子どもの頃には、天狗岩の下に小さなお宮さんが祀ってあったそう。岩ヶ谷に診療所があって、その家がお祀りしていたのだという。

岩ヶ谷は、江戸時代には世帯数六十戸を数えた集落であったといわれている。診療所があったことも納得できる。藤田さんの話を聞きながら、溪流に沿った戻り道の両側を見るときながら、スギやヒノキが植えられた土地が、段々になった平地であるのがわかる。溪流に沿って、大きな町が開けていたのだ。岩ヶ谷という集落の名前が納得できる。(西岳人)

▲梓川の二俣分かれにそそり立つ岩ヶ谷の天狗岩

▶「喜」を意味する梵字が彫られている

動物にちなんだ石・三態

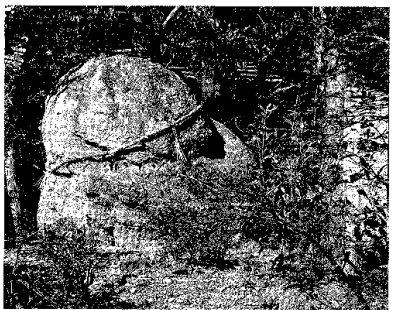
太閤さんゆかりの虎と亀

関ヶ原古戦場には、徳川家康が腰掛けたという石が残っている。大津坂本には、織田信長ゆかりの石があるらしい。ならば、湖北には豊臣秀吉ゆかりの石もあるはずと探したら、ありました。秀吉さんゆかりの豊国神社の「虎石」がそれ。ひょうたん池のそばに注連縄を張られ、いかにも霊石という感じで鎮座している。虎がうすくまったような形に見えるから虎石、なのだそうだが、うむ、ど

うだろう!?

この石はもともと長浜域にあり、秀吉に寵愛されていたという。毎日頭をなでてもらっていたのだろうか。それがいつの間にか大通寺の境内に移されたものだから、毎晩、住職の夢枕に立って「いのう、いのう」と泣き続け、お城の一部である豊国神社に移されたと言われている。

虎石のそばには、「福万年亀」というおめでたい名前の石が伏せている。そう、亀さんのように見える石だ。



▲太閤さんの虎石 (長浜市豊国神社)



▲これは亀に見えます。「福万年亀」(長浜市豊国神社)

怪物を退治した犬

虎と亀に出会ったところで、犬にちなんだ石も紹介しよう。湖岸に近い平方天満宮の奥の方に、「犬塚」と呼ばれるお墓がある。神社の入り口に、その由来の書かれた紙が置かれている。それによると次のようないわれがあるという。「昔、天満宮には、毎年人身御供を捧げる風習がありました。ある年、木の陰に潜んだ村人は、

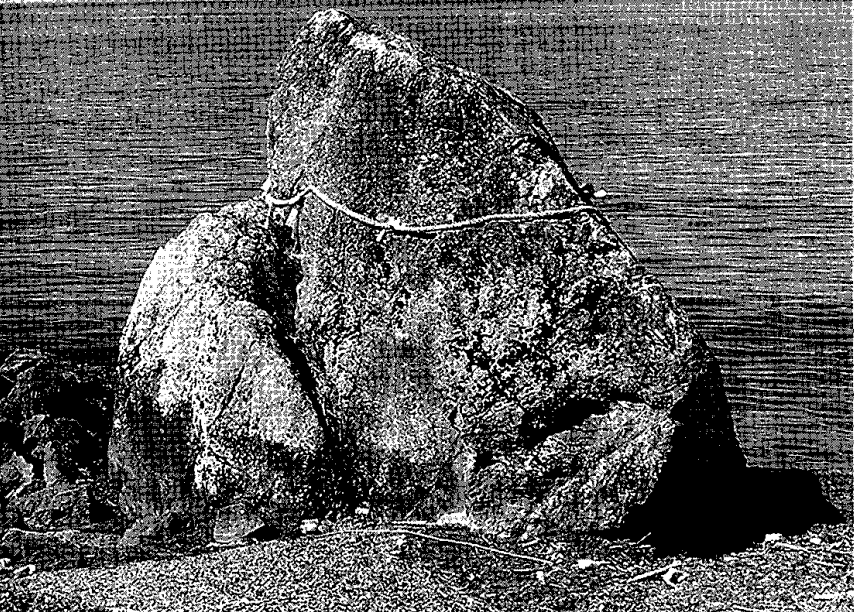
人身御供を求め、湖から現れる怪物で、それが「めつき」と呼ばれる猛犬、目検枷を恐れていることを知ります。村人は、怪物退治のために、野瀬の長者の飼った、目検枷を借り受けました。翌年、大格闘の末、怪物は力尽きました。目検枷も深手を負い、息を引き取りますが、怪物の身体には、目検枷の鋭い歯根が残っていました。社殿の北側の犬塚は目検枷の墳墓であると伝えられています。この石にふれた手で痛む歯を撫でると、痛みが止まるといわれます。」



▲名犬目検枷を祀る犬塚 (長浜市平方町)

烏帽子岩 (米原市磯) 三水四石 (米原市醒井)

琵琶湖と湧水 淡海にまつわる石たち



▲湖岸の烏帽子岩。乳母が乳飲児を抱いているように見えるので、地元の人たちは「おんばさん岩」とも呼ぶ。また、「結び岩」とも呼ばれる。二つの石が寄り添っているようですが、ほのぼのした印象だ

米原は水の郷。石の伝説も水にまつわる。びわ湖畔、磯の烏帽子岩。醒井の三水四石。これらの伝説について、二人の方にお話をうかがった。

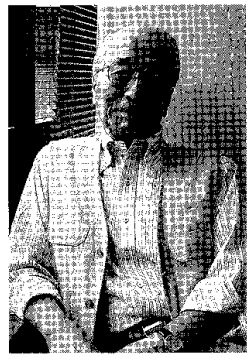
磯崎啓さんが語る「烏帽子岩と古代人」

米原市磯のびわ湖畔にある「烏帽子岩」は、高さ約四メートルの美しい大岩である。磯と烏帽子岩は和歌にも登場する。

磯崎を漕ぎたみゆけば近江の海
八十の湊に鶴さにはなく 高市連黒人
磯崎の結びの岩に住む亀は 和泉式部
一しおそめて甲や千すらん

そもそも古代の湖北の人々にとって、烏帽子岩は、どんな存在だったのか。米原公民館でコーラスも指導している万葉研究者の磯崎啓さんにインタビューを試みた。

「大和朝廷の人達は『海』そのものを見たことがないから、大きなびわ湖は、それだけ驚きの存在だったんだよ。また、東国から都へ



▲万葉研究者の磯崎啓さん